

一八八五年十月二十六日(月)

シャームプクルの家における聖ラーマクリシュナと信者たち

聖ラーマクリシュナ、ギリシユ、校長、若いナレン、カーリー、シャラト、ラカール、  
サルカル先生他、信者たちと共に

今日はアツシン月黒分三日目、月曜日。カルティク月十一日——一八八五年十月二十六日。大<sup>シユリシユ</sup>聖  
大<sup>バラムのサ、デラフ</sup>覚者様はカルカッタのシャームプクルにある家に療養のためご滞在中である。医師のサルカル先  
生が治療にあたっている。ほとんど毎日のように診察に来るのだが、その上、タクルの病状を一々  
報告するために、始終、誰かが医師のもとに通っている。

涼しい季節である。数日前から秋のドウルガー・プージャが始まっていた。この大祭の日々を、聖  
ラーマクリシュナの弟子グループは、悲喜こもごもの気持ちで過ごした。師の君の難病が喉<sup>のど</sup>のガンで  
あると診断されてから三ヶ月——。サルカル先生はじめ医者たちは、この病気は不治であるというこ  
とを皆にほめかしていた。これを聞いた弟子たちは、一人ひとりかくれて泣いていた。いまシャ  
ムプクルの家にいらっしやる師を、弟子たちは命がけの熱心さで看病しているのだった。ナレントラ

たち世俗の欲を捨てた若い弟子たちは、この重大な目的のために、女と金を捨てる」というハシゴを既に一段一段のほりつつあった。

これほどの病気だというのに、人々は次から次へと三々五々連れ立ってタクルに会いに来る。——聖ラーマクリシユナのおそばに来さえすれば、たちまち心は平安になり、喜びでいっぱいになるのだ。まったくの無辺際の恵みの大海だ！その慈悲心には限りもなく、どんな人でも話をして下さり、そのことによつて彼らに真の幸福を与えて下さるのである。遂に医者たち、ことにサルカル先生は、人と会話することを全面的に禁止した。しかし彼自身は、一日におよそ六、七時間もタクルのそばに坐っているのであった。——「人と話をしてはいけません。ただし、私とだけはして下さい」聖ラーマクリシユナの不滅の言葉、甘露の宝雨を飲んで、医師は得も言われぬ心の喜びに浸って帰って行くのである。それで、こんなに長時間、腰を落ち着けているのだ。

校長は、午前十時ころ医師にタクルの病状を報告するために行くことになっており、聖ラーマクリシユナとお話ししていた。

聖ラーマクリシユナ「(校長に)——とても楽になったよ。とても具合がいいんだ。アッチャ、薬のせいかな？ それならこれが続けたらいいね」

校長「私が先生のところまいりまして、全部報告いたします。どのようにすれば一番よいか、言つて下さいますでしょう」

聖ラーマクリシユナ「(原典註)なあ、プールナがここ二、三日見えないようだが、どうしたんだろう。気になつ

てしようがないよ」

校長「カーリーさん、どうかプールナをさそって連れてきて下さいよ」

カーリー「すぐ行つてきましょう」

聖ラーマクリシュナ「(校長に) 医者の子はいい青年だね！一度、来るように言つておくれ」

### 校長と医師の会話

校長が医師のところに行くと、医師は二、三人の友人と部屋にいた。

医師「(校長に) つい今しがた、あなたのことを話していたんですよ。十時ごろ来ると言つておられたので、一時間半ばかりもここで待つていました。(タクールは) どんな様子か、どうなすつたのかと心配していたのです。

(友人に) お、あの歌をうたつてくれ給えよ」

友人は歌つた――

主の御名をうたえよ、命尽きる日まで

まばゆき光は、全世界にあまねく

愛の蜜と乳ながれて、諸人<sup>ちひび</sup>歎喜す

そのやさしさ思えば、身はふるえ言葉も出ず

かの恵みに、悲しみ全て一瞬に消え失す

上は大空、下は地の果て、深き海の底まで

窮極きわみはどこか、限界はてはどこかと

ああ 我らはいいつも常に探し求める

意識いの住家すみか、無智の宮居、永遠に目覚めたる

かの清浄無垢なるものに会えば

我らの悲苦はあとかたもなく消ゆ

医師（校長に）——いい歌だと思いませんか？　ここのところはどうです？

上は大空、下は地の果て、深き海の底まで

窮極きわみはどこか、限界はてはどこかと

ああ、我らはいいつも常に探し求める」

校長「そこがすばらしいですね！　無限に対する思いがよく表れています」

医師（愛情をこめて）——だいぶ時間がおそくなりましたが、食事はお済みでしたか？　私はいつも十時ころに済ませてから仕事にかかるのです。そうしないと調子がわるいものですからね。いつか

（原典註1）プールナ・チャンドラの年令は、この時、十四、五才。

皆さん方(タクルの信者たち)に食事をさしあげたいと、常々考えているのですが——」

校長「それはありがたいことです、先生」

医師「ここがよろしいですか、それともあそこの方が? ご都合のいい方をおっしゃって下さい」

校長「どちらでも結構です。私もみんな、大喜びでごちそうになりますよ」

こんどは大実母カーリーのことが話題に上った。

医師「カーリーは、サントル族(インドの部族)の女性なんですよ」

校長は吹き出した。

校長「いつたい、どこにそんなことが書いてあつたんです?」

医師「何となく、そんなふうに入ってきたんですよ」(校長笑う)

前の日、ヴィジャイ氏はじめ大勢の信者たちが霊的興奮のため恍惚状態(こうごう)になった。医師もそこに居合わせた。そのことが話題になった。

医師「霊的恍惚、たしかに見ましたがね——。しかし、ああいうことも度が過ぎるとよくないんじゃないでしょうか?」

校長「大覚者(パラマハサ・デーヴ)様がおっしゃるには、神を想って興奮したり恍惚状態になるのは、グシ過ぎるグシということはないとのことです。決して害になるようなこととおっしゃるのです。宝玉の輝き(かがや)のようなもので、それは心を明るくし、身体に安らぎをあたえるだけで、決して焼けることはない——」

医師「宝玉の光か……。それは“Reflected Light”(反射された光)だ——」

校長「それから、不死の湖に沈んだら人間は死なない、ともおっしゃいました。神は不死の湖なのです。そこに沈んだら害になるところか、人間は不死になるのです。ま、もちろん、神を信じている場合ですが——」

医師「フーム、そりやそうですか」

医師は馬車に乗った。三、四軒、患者をまわってから大覚者様のところに行く予定だ。馬車のなかで医師と校長がまた話をした。医師は、マヒマー・チャクラバルテイ氏の高慢さについて、さかんに言及する。

校長「大覚者様のところによく来ていますからね。たとえ、今のところ少し我執高慢があったにしても、すぐになくなりますよ。タクルのお傍に坐っていたら、いつのまにか人間の我執高慢は逃げ出してしまいます。コナゴナになってしまいますよ。何故なら、あの方にはそういうものがこれっぽっちもないんですから——。虚栄とか誇りとかいうものが全くない場所になると、我執高慢はいたたまれなくなつて逃げだすのです。あの有名なヴィディヤサーガル先生でさえ、タクルに対して実にへり下つた丁寧な姿勢でしたよ。大覚者様が会いにいらしたのです——バドウルバガンの先生のお宅へ。おいとまなすつたのは夜の九時ころでしたが、ヴィディヤサーガル先生は書斎からずーとついてきて、自分で灯りあかをもつて馬車にお乗せしたのです。それに、お別れのときは合掌してお見送りしていました」

医師「はあ、それで、あの方のことをヴィディヤサーガル先生はどう思いましたか？」

校長「あの日はとても尊敬しておられました。しかし、後日話し合ってみましたところ、いわゆるヴィシユヌ派の人たちが靈的恍惚と言っている状態をあまり好んでおらず、どちらかといえば批判的でしたよ。あなたと同じようなご意見です」

医師「手を合わせたたり、人の足に額をつけたり、私はそういう種類のことは好みませんのでね。頭も足も、私にとつちや同じことなんだから——。でもまあ、足に特別な意義を感じている人は、お好きなようにすりゃいいでしょう」

校長「あなたは、法悦とか靈的恍惚などというものがあまり好きではない。大覚者様パラマハンサ・デーヴがときどきあなたのことを、奥行きウチの深い魂ソウルだとおっしゃるのを、多分気付いていらつしやるでしょう。昨日もこうおっしゃったでしょう——『小さな池に象が入ったら水が四方八方に飛び散って大へんな騒ぎになるが、大きな深い湖に象が入ってもロクなさざ波も立たない』と。深い魂は、靈的興奮の象が入っても何事も表面には表れないのです。あの方はあなたのことを、深い魂ソウルだとおっしゃるのですよ」

医師「I don't deserve the Compliment.」（私はそんなお言葉に値するような人間じゃありません）。結局のところ、靈的恍惚とは何ですか？ フィーリングです。信仰、そのほかにもいろいろなフィーリングがあるが、ある人はそれを抑制し、ある人は抑制できない」

校長「説明が出来る人もあり、出来ない人もある。しかし先生、バーヴァとかバクティとかいうものは、一種独特のものでしたね。ステッピングのダーウィニズムに関する本があなたの書棚にありま

したが——ステッピングはこう書いております。人間の心というのは、それが進化の結果にせよ、神の特別の設計で創ったものにせよ、とにかくすばらしいものだ。彼はまた、光の法則を使つて非常によい説明を加えています——“Whether you know the undulatory theory of light or not, light in either case is equally wonderful.”（光の波動説を知るも知らずも、いずれも等しく、光は素晴らしきものである）」

医師「フー。それにステッピングはダーウイニズムも認めているし、また神をも認めている」

そして、聖ラーマクリシュナの話題になった。

医師「あの方（大覚者様）は、カーリーを拜んでいらつしやるんですね」

校長「あの方のカカーリーグは、また一種独特の意味を持つています。ヴェーダで至上梵（パラブラマン）といつてゐるものを、あの方はカーリーと呼んでおられるのですよ。イスラム教徒がアッラーとして拜むもの、クリスチャンがゴッドとして拜むもの、それをあの方はカーリーと呼んでいらつしやる。あの方はあれこれ多くの神をご覧にならず、ただ一つだけご覧になる。古代のブラフマンの智者（ジニヤニ）たちがブラフマンと呼ぶもの、ヨーギーたちがアートマンと呼んでいるもの、信仰者（バクヴァン）たちが至聖と呼んでいるもの、それを大覚者（パラム・ハシナ・デーワ）様はカーリーと呼んでいらつしやるのです。

あの方に聞いた話ですが——ある人のところに染桶があつて、染料が溶かしてある。誰かが布を染めたくなると、その人のところに行つて染めてもらう。その人は、「あんた、何色に染めたいのかね？」と聞く。緑色に染めたいと言へば、その布を桶に入れて、「さア、緑色に染まったから持つてお行き——」



と言う。赤い色に染めたいと言えば、同じ桶につけて赤く染めてくれる。青い色も黄色も同じこと。この不思議な現象を見て一人がこう言いました。『ご主人、私は何色に染めていただきましようかね。そうだ、あなたの染めたい色に染めて下さい』と。

ちようどこんなふうには、大覚者様の中にはすべての宗教的理想と心情があつて——あらゆる宗教や宗派の人たちがあの方のところへ行くと、心の平安と喜びを得られるのです。誰もあの方の深い境地を理解できやしませんよ」

医師「それは感心しないなあ。——“All things to all men, although St. Paul says it.” (“すべてのものをすべての人に”)と、聖パウロは言っていますよ」

校長「大覚者様の境涯を完全に理解することなど、誰ができますか？ あの方がおっしゃったことですが、専門の糸商人でなければ四十番の糸と四十一番の糸とを見分けることができないし、画家でなければ画家の芸術がどの程度のものが評価できないのです。大覚者様の境地は、キリストぐらいでなければじゆうぶんに理解できないと思いますよ。大覚者様のあの深い境地は、たぶん、キリストの言ったあの言葉に相当するのではないでしょうか——“Be perfect as your Father in heaven is perfect.” (“汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ”)《マタイによる福音書 5章48節》」

医師「アッチャ、あの方の病気の看護について、あなた方はどんなふうに行っているのですか？」

校長「今のところは、毎日一人ずつ年配の人たちがお世話しております。ギリシユさん、バブラームさん、バララームさん、スレンドラさん、ナヴァゴパールさん、カーリーさん——こういった人た

ちが交替に当番を受け持つて下さるのです」

信者たちと共に——学問だけではどうにもならぬ

こんな話をしているうちに、大聖タクールシヨロシヨロ、大聖タクールバマハサヨウサ、大覚者マハサヨウサ様が病氣治療をしておられるシャームプクルの家の前に医師たちの乗った馬車は着いた。午後の一時であった。タクールは二階の部屋に坐つておられる。大ぜいの信者たちが来ていた。そのなかにギリシユ・ゴーシユ、若いナレン、シャラトたちもいる。みな一様に、その偉大なるヨーギー、常に喜びに満ちた聖者マハフルシャの方に視線を向けている。まるで蛇使いに呪文をかけられたヘビのような様子で坐つていた。花婿に従つていく行列のように、嬉々ききとした雰囲気でもある。医師と校長は部屋に入つてあいさつをし、席についた。

医師を見ると、タクールはうれしそうに笑い声をたてながらおっしゃる——「今日はどうしても具合がいいよ」

そして又、信者たちと神に関する話が続けられた。

〔以前の話し——ラームナラヤン医師——バンキムの話〕

聖ラーマクリシユナ「ただ学問をしただけじゃ、どうにもならんよ。識別心ヴィヴェクと離欲ヴァイラクヤの気持ちがないりゃね。わたしは神の蓮華の御足のことを想っていると、一種の決まった状態になるんだ。着ている下衣カポルが下に落つこちてしまつて、何か足先から頭のとつぺんに向かつて、スルスルと上がつてい

く感じがする。そうなると、あらゆるものが雑草みたくに見えてくる。識別心もなく、神を愛する心もない学者を見ると、ワラクスが一本、そこにあるような気になるんだよ。

いつかラームナラヤン医師と議論をしていたら、とつぜん、いま言ったような気分になってね、こう口走ってしまった——『何を言ってるんだい？ あれこれ口で説明したって、神さまのことがわかるかい！ あの御方の創造のことが——。あなたにはちつともわかっちゃいないんだよ。つまらん俗物が！』わたしの様子を見て、彼は泣き出したよ。そして、わたしの足をさすっていた」

医師「ラームナラヤン医師はヒンドゥー教徒ですからねえ！ 花だの、白檀だのと、しょっちゅうおっしゃる！ 正真正銘のヒンドゥー教徒ですよ」

校長（内心で思う）——サルカル先生は、自分は宗教における礼拝儀礼の如きものには何の関心もない——と云っているのだ！

聖ラーマクリシュナ（医師に）——バンキムはあなたたちの仲間の学者だろう。いちど会ったよ。

（原典註）

わたしが、『人間の義務は何だと思う？』と質問したら、こうだ。『食べることに、眠ること、それから女とセックスすること』これを聞いて、わたしは何か知らん、無性に嫌悪感を感じてね、こう言っちゃったよ——『あなたの言っていることは、そりゃ何だい！ 見下げ果てた人だ。毎日、朝から晩まで考えたりしたりしていることが口から出てくるものだ。ダイコンを食べたらダイコンのゲップが出る』まあ、そのあとで、神さまの話をいろいろしたがね。そこでキールタンがあつて、わたしは踊つたよ。するとバンキムが、『先生、私どもの家にぜひ一度おいで下さい』と云うから、『それは神の思おぼし

召し——』と答えておいた。すると又、『私どものところにも信者たちがおりますから、会ってやって下さい』と言う。わたしは大笑いしながらこう言ったよ。『どういう種類の信者だね？ ゴパーラ、ゴパーラと呼ぶ、ああいう種類の人たちかい？』

医師「その、ゴパーラ、ゴパーラ、というのはどういふことですか？」

聖ラーマクリシュナ「（笑いながら）——金細工の店があつてね。主人は大へん熱心なヴィシュヌ派信者ということで——首には数珠輪をかけ、額には赤い印、手には称名用の数珠をいつも持っている。皆はこの店にせつせとやってきた。この店は信心深い人がやっているのだから、決してゴマかしたりウソを言ったりしないだろう、と思つてね。一かたまりのお客が入つてくると、使用人の一人が、『ケーシャブ、ケーシャブ』と言う。もう一人の使用人がちよつと間をおいて、『ゴパール！ ゴパール！』と言う。またしばらくすると、別の使用人が、『ハリ、ハリ』と言つた。またそのあとで店の誰かが、『ハラ、ハラ』と言つた。もちろん、これはみな神さまの名だから、お客たちは単純に、こ

（原典註2）バンキム・チャンドラ・チョットパツダエ（1838～1894）——カルカッタ、ベネトラ地区に住む有名な作家。ベンガル語で『バンデ・マタラム』を書いている。聖ラーマクリシュナは、熱心な信者の一人であるアタル・センの家で、彼に一度（一八八四年十二月六日）会つてゐる。以下、編集者による補足——『バンデ・マタラム（母なる大地に敬意を表す）』は彼が一八七五年に書いた詩で、後にタゴールにより作曲され、インド独立の気運が高まる中、愛国歌として歌われ、独立後、国歌の有力候補にまでなつた。彼がベンガル語で書いた小説『アーノンド・マト（喜悅の寺院）／邦訳あり』の中でも詠まれている。

の店の人はみな、何て立派な信心深い人たちだろう。と感心していた。だが、本当のところどういことだかわかるかい？ 実はね、ケーシヤブ！ ケーシヤブ！と言ったのは、『この連中はどういう人たちだろう？（エシヨブ、ケ）』という意味。ゴパール！ゴパール！は、『私が見たところ、せいぜい牛飼いの仲間だ（ゴルル、パロ）』（一同笑う）ハリ、ハリは、『牛飼いなら、ふんだくつてやれ（ホロン、コリ）』ということ。ハッハッハ。そして、ハラ！ハラ！は、『じゃあ、ふんだくろう、ふんだくろう、たかが牛飼いなんだから！』という意味だつたんだよ。アハハ……。

シエジヨさんに連れられてある場所へ行つた。大ぜいの学者バンディットたちがわたしと議論しに来ていた。知つての通り、わたしやイロハも知らぬ子どもだからね！（一同大笑）

みんな、わたしの様子をよく観察していた。それから、会話がすんでからこう言つたよ——『先生！あなたの言葉を聞いて、私どもはよくわかりましたよ。今までしてきた学問が、まことにつまらぬものだということが——今、はつきり理解しました。神のお恵みがあれば智識に欠けるところがなくなり、愚かだつたものは賢明になり、ろくに口もきけなかつた者も滔々とうとうとしゃべるようになるんですね！』だから、いつもわたしが言うだろう。本を読んだだけでは立派な学者バンディットにはなれないと——』

〔以前の話し——最初の三昧——神の実感——サラスワティーが無学な者の喉のどで話される〕

「そうとも、あの御方のお恵みがあれば、智識に不足などあるかい？ ごらん、わたしはロクに字も読めぬ子どもみたいなものだ、ナンにも知らないよ。だのにこういうことをしゃべるのは、いったい

誰なんだろうね？ 神の智慧のお蔵くらは、いくら出しても減らない。郷里きょうりに穀物商がいてね、ラーム・ラーメ・ラーメ（掛け声）なんて言いながら穀物を量はかる。一人が量ると、後ろにいる人が次から次へと穀物の山を手元に押し出す。後ろにいる人はそれが役目なんだ。わたしの話もそれと同じで、話すそばから次々と後あとが出てくる。マーが無限の智識ちしき蔵くらから、際限きりもなく出して下さるんだよ！

子供のころ、あの御方の存在をありありと実感したんだ。十一のときだったよ。野原で、何というものを見たことだろう！ みんなは、わたしが気絶きせつしていて何の感覚もなかった、と言っているがね。あの日からわたしは、すっかり皆とは別の人間になってしまったんだよ。自分のなかにもう一人、誰かいるのがわかるようになった！ お寺で参拝していると、手が神像の方よりも自分の頭の方の方向ほうにきて、そこにお花を供えたりしたものだ！ わたしといっしょにいた青年が、わたしのそばに寄りなくなった。『あなたの顔に光があつて、あまり近ちかよると恐こわいんだ』とよく言っていた！

**FREE WILL OR GOD'S WILL? (自由意思とそれとも神の意志)**

ヤントラールルダーニ マーヤヤー（『神の現象マヤによつて機械の上に乗せられて』）

——ギーター 18・61——

聖ラーマクリシュナ「わたしはホントに、無学文盲で何一つ知りやしない。それなのにこういう話をするのは、いったい誰だろう？ わたしはいつも言っているよ——『マー、わたしは道具、あんたが使い手。わたしは部屋、あんたが住み手。わたしは馬車、あんたが御者だ』と。させる通りにわたし

はする、言わせる通りにわたしは言う。動かす通りにわたしは動く。ナハン、ナハン(私じゃない、私じゃない)、トゥフ、トゥフ(あなた、あなた)。すべてはあの御方の栄光、わたしはただの道具! 聖シユウ・マテイマテイ女メ(ラーダー)が自分の純潔の証あかしにと、千も口のついた水がめに水をいっぱい入れて頭にのせて運んだ。ところが、水はただの一滴もこぼれなかった。皆は口をきわめて誉めそやした。いまだかつて、これほど純情貞潔な女性はなかっただろう、と言って。するとラーダーは、『あなた方、どうしてわたしなんかを誉めるのですか。クリシユナを誉め讃たたえて下さい! クリシユナ万才! わたしはあの御方の侍女にすぎません』

あの境地のときに、わたしはヴィジヤイの胸に足をのつけた。あれほど尊敬しているヴィジヤイの胸に、あろうことか足をのつけたんだよ! このこと、どう思う?」

医師「以後、お気をつけになればよろしいでしょう」

聖ラーマクリシユナ「(合掌して)——どうすりゃいい? あの境地になると、外の意識がなくなってしまうんだもの! 何をどうしたのか、ナンにもわからないんだよ」

医師「お気をつけになるべきです。合掌したからってどうなるものでもありませんよ」

あなたは、わたしあの境地をどう思っているんだい? もし、ワザとそんなフリをしているんだ、などと思っているなら、あなたの勉強したサイエンスとかマイエンスとかいうものは、実にくだらんものに相違ちがないよ」

医師「先生、あなたがそんなフリをしているんだと私が思っていたなら、こんなにしげしげとここに来るでしょうかね？ 何もかもおっほり出してここに来ているんですよ。ほかの患者の家にもロクに行かないで、ここに来て六時間も七時間も坐りこんでいるのを、よくご存知でしょうが……」

〔私は戦わない——バガヴァッド・ギーター——神がなさっているだけでアルジュナはただの道具〕

聖ラーマクリシュナ「シエジョさんにも言ったことがある——あんたみたいな金持ちがわたしを尊敬するようになったから、わたしが恩義を受けたと思っっているなら大間違いだよ！ あんたが尊敬してくれようとくれまいと、わたしにとっちゃどうということもないんだ。——まあ、だがね、人間が何をするかは、神さまのお許しあつてのことだ。神の力の前では、人間はワラくずみたいなものさ！」

医師「あなたは、どこかの〔訳註〕漁師〔訳註〕があなたを〔訳註〕（神〔訳註〕の化身〔訳註〕）認めていたから、わたしもあなたを認めているとも思っているのですか？ \* \* \* しかし、あなたを尊敬しているのは確かです。あなたを一個の人間として……」

聖ラーマクリシュナ「認めてくれなんて、一度でも頼んだかい？」

〔訳註1〕 漁師——シエジョさん〔訳註〕マトゥール氏〔訳註〕のことで、低い漁師のカーストに属していた。

〔訳註2〕 ベンガル語原典のコタムリトには、\* \* \* \* \* などの記述が数ヶ所見られるが、これは著者が読者に伝えることをためらった内容だと思われる。その中には著者への褒め言葉も含まれる。



ギリシユ「この方が、あなたに認めるとおっしゃったのですか？」

医師「(タクトールに) いったい、何を言ってるんですか? ——それも神さまの思召しですか?」

聖ラーマクリシユナ「ほかに仕様がなないじゃないか! 神の力の前で、人間は何ができる?」

アルジュナがクルクシエートラの戦場でこう言った——「私は戦えません。同族を殺すことはできません」すると聖クリシユナは、こうおっしゃった——「アルジュナよ、戦え。戦うのがお前のもつて生まれた運命なのだ」そして、聖クリシユナは戦士の死骸が累々と横たわっている戦場の有様を透視(原典注)させて下すつた。

シーク教徒が寺に来たことがある。その連中も言っていたよ——「アスワツタの木の葉が風でそよぐのも神の思召し。神の意志がなくては木の葉一枚だって動かない!」

[Liberty or Necessity? (自由意志か必然か?) —— Influence of Motives (行動を起らせる気持ち)]

医師「もし、すべてが神の思召しなら、じゃあ、あなたは、なぜこんなにしやべるのですか? なぜ、ほかの人に智識を与えようとしてしやべるのですか?」

聖ラーマクリシユナ「あの御方がしやべらせるから、こうしてしやべっているのさ。わたしは道具、あの御方が使い手だもの」

医師「自分を道具ツグと言うなら、黙っていてください。あらゆる人が神、なんでしようから——」  
ギリシユ「(医師に) ——あなた、どうお考えになろうとご勝手ですが……。実際のところ、神がさ

せるから、我々はするんですよ。"A single step against the Almighty will." (全能者の意志に逆らって、たとえ一歩でも動けるか?)」

医師「あの御方が Free Will (自由意志) を人間に与えて下さったんですよ。私がしようと思えば、神を想うこともできる。また、しようと思わなければ、想わないでもすむ」

ギリシユ「あなたが神を想ったり、あるいは世間でよい仕事をなさる。しかしそれは、あなたがなさっているのではない。それをしたという気持ち<sup>キ</sup>がさせているのです」

医師「どうですか? 私はそれを自分の義務だと思つてするのです」

ギリシユ「それも、あなたがそれをする<sup>ス</sup>ことを好むから、なさるのです」

医師「子供が火事で焼け死にそうになっている——それを助けに行くのは義務だと感じるからで……」

ギリシユ「子供を助けることに喜びを感じるから、火の中にとびこむのですよ。喜び<sup>グ</sup>があなたをその行動にかりたてるのです。チャット(香料<sup>スパイス</sup>の効いた軽食<sup>スナック</sup>)<sup>が</sup>食べたいがために、付け合わせの苦い<sup>にが</sup>添え物を食べるようなものです」(一同笑う)

(原典註3) ムマイヴァイター ニハターハ プールヴァム エーヴァ ニミッタ・アットラン バヴァ サツ  
ヴァサーチン『わたしは既に彼らの死を決定したのだ 弓の名手(アルジュナ)よ ただ、戦う道具となれ』

——ギーター 11・33 ——

〔知識——知るべき対象——知る人——この三つが行動の原動力〕

聖ラーマクリシュナ「何か事をするには、一つの信念が必要だ。そして、それを思うことによつて喜びを感じるようになり、そしてはじめて、人は何か行動を起こすんだよ。この地面の下に金貨のつまつたカメラがある——これを知る、ほんとにあるんだと信じる、これが先ず第一に必要なことだ。そのカメラのことを思うと、嬉しくてワクワクする。それから、実際に土を掘るんだ。掘っていくうちに、カチンと音がする。その嬉しさ！ やがてカメラの端が見えてくる。ますます嬉しくなる。こういうふうにして喜びがだんだん増してくるばかりだ。

寺のペランダで、いつか立って見ていたらね——サードゥが大麻を吸う支度をしていたが、その顔つきの嬉しそつたこと！

医師「しかし火は、ヒート(熱)も出すし、ライト(光)も出します。光では、たしかに周囲が明るくなりますが、熱は体を焦がすでしょう。義務を行うにあたっては、喜びばかりでなく、苦痛だつて伴いますよ！」

校長「(ギリシユに)——腹に食物が入れば、施し主から少々打たれても背中是我慢する」という諺がありますからね。苦しみの中にも喜びがあります」

ギリシユ「(医師に) 義務とは砂漠のように乾いたものです」

医師「なぜです？」

ギリシユ「そして、喜びのオアシスがある」(一同笑う)

校長「けっこう。さて、また、チャットが食べたいがために、付け合わせの苦い添え物にを食べる、という論点に戻りました」

ギリシユ「(医師に)——義務を行うことは喜びであるはず。そうでなければ、なぜするのですか?」

医師「心のインクリネーション(傾向、習性)ですよ」

校長「(ギリシユに)——その習性が心をひきずりまわすのです(一同笑う)。傾向とか習性とかの強制力を言いだしたら、Free Will(自由意志)なんて!」

医師「私は、人間の意志が完全にFree(自由)だとは言えませんよ。牛が縄でつながれている。その縄の長さの範囲における自由です。縄を引っ張ろうとすれば、また——」

〔聖ラーマクリシユナとFree Will(自由意志)〕

聖ラーマクリシユナ「その話はジャドウ・マリックもしていたが……。 (若いナレンに)——イギリスの本にでも書いてあるのかい?」

(医師に)——神がすべてを為し給う。あの御方が使い手で私は道具——ね、この信念が不動のものになったら、その人は生ジューヴンムクダ前解脱者だ。あなたの仕事をあなたがするに、人は『私』がすると言う。

(訳註3) この見出しの言葉はギター18・18からの引用

——どんな具合のものかわかるかい？　ヴェーダーンタに一ついい説明があるよ。鍋で料理をする。ジャガイモやナスなんか米にまぜてある。しばらくして火が通つてくると、イモ、ナス、米、みんな跳ね上がり出す。すると、せいづらはウヌボレて、『私は動いている！　私は飛び上がっている！』と思う。小さな子供はそれを見て、イモやナスは生きているからあんなふうには飛び上がっているんだ、と思う。いくらか大きくなつて知恵がついてくると、イモやナスや米は生きているんじゃない、自分で飛びはねているんじゃない、鍋の下に火が燃えているから、あんなふうには動くのだ、燃えている薪を除つてしまえば動かないんだ、ということがわかつてくる。人間の、私が為るのだ、というウヌボレは、無知無明のせいだよ。神様の力であらゆるものに力があるんだからね。燃えている薪をとつてしまえば、何もかも黙る。あやつり人形は人形使いの手であやつられて見事に踊っているが、手から離れると、もうちつとも動かない！

神を見ないうちは——あの智慧の宝玉に触らぬうちは、自分が行動者だと錯覚しているんだよ。私は善いことをしている、私は悪いことをしている——こんな差別の感じがするんだ。この差別感がつまり、あの御方の創造現象なんだ。マールヤーの世界で暮らすために与えてくださったものなんだよ。明知のマールヤーに従つて正道を行けば、あの御方をつかむことができる。つかんで、対面して、マールヤーの向う岸に渡ることができるのさ。あの御方ただひとりが行動者であつて、私は人形か道具にすぎない……。この不動の信念がある人、それこそ生前解脱者だ。この話は、ケーシヤブ・センにもしたがね」

ギリシユ「(医師に) Free Will(自由意思)があるということが、どうしてわかるんですか?」

医師「Reason(推理判断)によつてではありません。——「I feel it」(私はそう感じるのです!)」

ギリシユ「Then I and others feel it to be the reverse.」(では、私共一同は、その逆に感じるのです!)(皆笑う)

医師「義務のなかに二つの要素があります。一つは、しなければならぬという気持ち、二つめは、喜びの感じ。しかし、はじめから喜び勇んでするわけではない。子どもの頃に見たんですが、お寺の役僧が神様にお供えしたサンデシユ(ミルク菓子)に蟻がたかつてくるので心配になりました。役僧は、初めからサンデシユのことを思つて喜ぶことが出来ないですよ(皆笑う)。まずは、この蟻をどうしたものかと心配していたんです」

校長(内心で思う)——義務を行っている最中とか、行い終わった後で幸福感にひたれるかどうかは判定し難い。喜びの感情の力で仕事をするのが、果たして Free Will(自由意思)だろうか?

### 無条件の信仰——以前の話し——タクルの神の召使い

聖ラーマクリシユナ「この人(医師)の言いなすつたことは、無条件の愛慕というんだよ。マヘンドラ・サルカルに対して、私は何も求めない——何も頼むつもりはない。ただマヘンドラ・サルカルに会うのが好きだから会うんだ——これが無条件の愛慕だ。でもそれによつて、すこし喜んだからっていいじゃないか?」

アハリヤー(訳註4)はこう言った——『ラーマよ！ 私はこんど豚の子として生まれてもちつともかまいません。ただし、あなたの蓮華の足に対する清い信仰を持ちつづけていられますように——。それ以外になんの望みはありません』

ラーヴァナを滅ぼすことを思い出させるために、ナーラダはアヨーディヤの都にラーマに会いに行つた。彼はラーマとシーターがならんでいるところを見て、讃詞を献じた。ラーマは満足してこう言つた——『ナーラダ！ よく言つてくれた。私は満足したよ。何か願ひ事をしなさい。叶えてあげよう』するとナーラダは申し上げた。『ラーマよ！ もし私に願ひ事を聞いて下さるなら、ぜひ、これをお叶え下さい。あなたの蓮華の御足に、純粹な信仰を持ちつづけていられますように——。それからもう一つ、あなたの世にも魅惑的なマーヤーに迷わされませんように——』ラーマが、『そのほかに何か望め』と言うとナーラダは、『ほかには何もありません。あなたの蓮華の御足に、純粹な信仰を持ちつづけていられますように——ただ、それだけを……』と答えた。

この人はそうなんだよ。神を求めるだけで、ほかに財産や名誉や、五官の楽しみなんか何も願わない。これが、純粹な信仰(シユッタ・バクティ)と呼ばれているものだ。楽しみが少しあつたからつて、これは世俗の楽しみじゃない。信仰の愛の喜びなんだからね。シャンブー(マリック)が言つていたが——そのころ、あの人の家によく行つたんだが——『あなたはよくここに来るが、ただ私としゃべるのが楽しいから、それで来なさるんだね』と。——ああいった楽しみもあるしね。

でも、その上の境地があるんだよ！ 子供のようには歩きまわるんだ——別にどうという目的もなし

に。たまにバツタでもつかまえたりして……。

(信者たちに向かつて) このお人(医師)の気持ちかわかるかね? 神に祈るとしたら——『神よ、我に正しい意志を与え給え。不正なことへわずかでも心が傾かぬように』——という心境なんだよ。

わたしにもそういう心境のときがあったよ。自分を神の召使いだというつもりでね。マー、マー、泣くものだから、みんなが見物していたもんだ。そんなとき、ある人がわたしを試すためと、そればかりじゃなく、わたしの気狂いじみた行いを直してやろうという思いで、一人の売春婦を連れてきてわたしの部屋に入れた——きれいな、パツチリした目の女だったよ。わたしや、マー、マーと大声でよばわりながら部屋から飛び出して、ハラダリ(タクルの従兄)に、『兄さん、誰か部屋の中にいるよ、行ってみておくれ』と言った。ハラダリにも、ほかのいろんな人たちにも、みんなに告げてまわった。あの心境の時は、いつも、マー、マーと泣き泣きつぶやいていたものさ。『マー! 護っておくれ! わたしを汚さないでおくれ。真理から一步も心が出ないようにしておくれ』(医師に)——あなたの心の態度はとていいんだよ。ほんとの信仰の気持ち、召使いの気持ちだ』

(訳註4) アハリヤー——ガウタマ仙の美しい妻。インドラ神と不貞を働いたために呪いをかけられたが、ラーマ王子に会えば呪いは解けるといふ条件に救われて呪いは解け、以後、ガウタマ仙の貞節な妻として暮らした

——『ラーマヤナ第一巻48〜49章』より



〔世のためとつまらない人間——無私の仕事と純粹サットヴァ性〕

「純粹なサットヴァ性になれば、その人は神のことばかり想つてほかのことには何も興味がなくな  
る。人によつては前生から受け継いだカルマで、この世に生まれたときから純粹なサットヴァ性を具  
えている。そうでなくても、欲を無くして何事もするように努力すれば、やがて純粹サットヴァ性を  
身につけることができる。ラジャス性の混じつたサットヴァは、いろんな方面に積極的になつて、世  
のため人のためにならうなどという一種のウヌボレ心が生じてくる。世のためになるなんていうこと  
は、つまらない人間にとつては大そう難しいことなんだよ。でも、他人に奉仕しようという気持ちで、  
欲のない仕事をするとはいいだらう。それは、無私、無欲の仕事だからね。そういうふうにしよう  
と努力するのは、大そういいことだ。でも、みんなに出来ることじゃない——とにかく難しいから。  
あらゆる人が仕事をしなけりやならない。なかで、一人、二人が仕事から離れることができる。そし  
て純粹サットヴァをもつようになつた人も、ホンの一人、二人だ。この無私の仕事をつづけることに  
よつて、ラジャスの混じつたサットヴァ性がだんだん純粹なサットヴァ性に変化してくるんだよ。純  
粹サットヴァ性になれば、神さまのお恵みで見神できる。一般の人は純粹サットヴァ性の境地を理解  
することができない。ヘムがわたしにこう言つたよ——「どうですか、バツタチャリヤ先生！こ  
の世で名をあげることこそ、人生の目的でしょうが、え？」（訳註、バツタチャリヤ——バツタチャリヤはパ  
ラモンの中でも聖職者など最高位のバラモンに与えられる称号でラーマクリシュナはこの階位に属していた）